

石川県金沢市

金沢城 惣構跡Ⅳ

～金沢城下町遺跡(西外惣構跡升形地点)発掘調査報告書～
-遺構編-

平成24年3月
(2012年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県金沢市

金沢城 惣構跡Ⅳ

～金沢城下町遺跡(西外惣構跡升形地点)発掘調査報告書～
-遺構編-



平成24年3月
(2012年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例 言

1. 本書は、石川県金沢市本町1丁目地内に所在する金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）の発掘調査報告書の遺構編である。
2. 西外惣構跡升形地点は、金沢市都市政策局歴史建造物整備課による「惣構堀復元整備事業」に伴い、平成20～22年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査の期間と場所、面積は次のとおりである。

平成20年7月28日～同年8月8日（試掘坑約40㎡）、平成21年5月27日～同年7月17日（西側約190㎡）、平成22年3月4日～同年3月12日（北東・南東側約190㎡）
4. 発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長 橋本澄夫氏、委員 谷内尾晋司氏、垣田修見氏、横山方子氏）の指導の下で、平成20年度は谷口宗治（文化財保護課主査）、平成21・22年度は庄田知充（文化財保護課主任主事）が担当した。
5. 発掘調査作業は、金沢市シルバー人材センターに業務委託して実施した。
6. 基準点測量・水準測量・グリッド設定および遺構実測は日本海航測株式会社へ委託した。
7. 本書の編集・執筆・写真撮影は、庄田知充が執筆・編集した。絵図写真については、各所蔵元から資料提供を受けた。
8. 本書に収録した遺物は、全て金沢市教育委員会が一括保管している。
9. 本発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の機関・個人からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を申し上げる（50音順・敬称略）。

清水敦子、富国生命保険相互会社
松本市教育委員会、「歴史的用水・堀」調査研究会各位
10. 屋内整理および製図は、次の方々にご協力いただいた（50音順・敬称略）。

井川明子、蟹ヤエ子、車谷律子、関屋裕美、谷森真利、寺西悦子、土橋裕美、
供田奈津子、畑尾ゆか、法桑加代、増山智子、松原良子、門谷藤代、米田夕美子
11. 本書の各図及び写真版の指示は以下の通りである。
 - (1) 方位は全て座標北である。座標は国土座標第Ⅶ系（測地成果2000）に準拠し、真北からは1分、磁北からは7度21分東偏する。
 - (2) 各図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも示している。
 - (3) 遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル（m）で記した。
 - (4) 惣構に関する遺構は、土居、堀、堀石積などと標記し、その他の遺構名は、SK：土坑、SD：溝、SP：小穴・柱穴、SA：石列・石積、SE：井戸、SX：大形土坑・その他の遺構などの略号を用いた。
 - (5) 惣構の各部位名称及び計測位置については、別途凡例に詳細を記載した。

目 次

金沢城惣構跡と関連調査の位置

第1章 惣構の位置と歴史的環境	1
第2章 西外惣構跡升形地点の発掘調査	2
第1節 既往の惣構調査と復元整備	2
第2節 位置と周辺環境	2
第3節 調査地周辺の城下絵図	2
第4節 調査の経緯・概要	2
第5節 遺構	5
第3章 総括	24

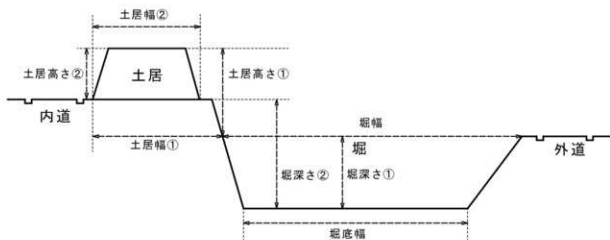
西外惣構跡升形地点関連史料

報告書抄録

写真図版

凡 例

惣構の規模等を示す名称は以下のように記した。





- ①外惣構跡 (武蔵町地点) ②東内惣構跡 (枯木橋北地点) ③西内惣構跡 (主計町地点) ④西外惣構跡 (升形地点)
 ⑤西内惣構跡 (尾山神社西地点) ⑥広坂道跡 (土居・内道)・金沢21世紀美術館南側水路 (堀) ⑦宮内橋詰遺構 (土居・堀)
 ⑧尾山神社南側 (土居) ⑨西外惣構跡 (本多町3丁目地点) ⑩兼六園 山崎山 (土居・堀) ⑪常福寺裏 (土居・堀)
 A* 金谷外橋御門前土橋 B* 不明御門前橋 C西町橋 D十間町橋 E近江町橋 F袋町橋 G新町橋 H* (奥村内膳殿) 後惣構土橋
 I九人橋 J藏人橋 K稲荷橋 L枯木橋 M段垣橋 N宮内橋 O香林坊橋 P右衛門橋 Q* 村井又兵衛殿前橋 R* 長又三郎殿前土橋
 S因書橋 T升形橋 U東末寺橋 V葎屋町土橋 W劍崎土橋 X橋中橋 W下材木町橋 Z小島屋町橋 @小立野虎口 (仮称)

註：A～Zは橋名で、*を付さない橋は『金沢惣構絵図』(文化八年・1811年)、*を付した橋は『遺橋帳写』(文政七年・1824年)による

金沢城惣構跡と関連調査の位置 (S=1/10,000)

第1章 惣構の位置と歴史的環境

石川県は日本海に面した南北に細長い県で、東は富山県、西は福井県、南は岐阜県と接している。旧国名では、北の能登国と南の加賀国からなる。

金沢市は、旧加賀国の北部で石川県のほぼ中央やや南に位置し、その中心地区は南東の山間部から伸びた小立野台地の麓にある。南東には奈良岳・奥三方・大門山など海拔1500mを超える山地が構えており、この山地に源を発して台地を挟むように南の犀川および北の浅野川が西流し、両河川に面した台地裾部は河岸段丘を形成している。日本海に面しては砂丘を背景とした海岸線が延び、犀川河口には金沢城下の外港の役割を担った宮腰湊（現金石港）、浅野川河口の河北高に続く大野川には大野湊があった。宮腰湊から城下へは、元和2年（1616）に築造された直線道路の宮腰往還のほか木曳川が通じ、犀川・浅野川と共に陸・水運を担っていた。

加賀藩は、加賀・能登・越中三国の大半を領地とした藩で、藩主は前田利家を藩祖とする前田家が世襲し、金沢城を拠点としていた。金沢城は、一向衆の拠り所であった金沢御堂旧地に築かれた織豊城郭を起源とし、舌状にのびる小立野台地先端部の崖を利用しており、城下外郭の東西は、前述の二大川により区切られている。金沢の惣構は、城を中心としてこの河川の内側を内・外二重に造っており、それぞれが小立野台地を挟んで東西2流に分かれている。惣構の立地位置は、両河川に向かって階段状に低下する河岸段丘崖部にあり、その高低差を利用して崖下に堀、崖上に土居を築いている。

測量に基づく城下町絵図は、寛文7年（1667）以降が知られ、多くの絵図に惣構が堀と土居として色を変えて表現されている。土居の盛土はほとんどが現存しないが、堀の一部は幅が狭まっているものの水路として残る箇所が多く、堀の線形を推定することが出来る。また、水路に隣接する土地の区画形状や、惣構内外に沿う道から、現在の地図上に土居と堀の範囲を比定することが可能となっている。

東内惣構は小立野台地東側裾部の小待町中学校敷地内を起点として始まり、尾張町1丁目の枯木橋で旧北国街道と交差したのち浅野川へ至る。延長約1.2km。東外惣構は小立野台地上に立地する兼六園の南東辺を起点とし、浅野川大橋東側で浅野川に至る。延長約1.6km。西内惣構は金沢城金谷丸跡である尾山神社南辺を起点とし、袋町橋で旧北国街道と交差、主計町緑水苑で浅野川に至る。延長約1.7km。西外惣構は本多町3丁目の丘殿裾部を起点とし、香林坊橋で旧北国街道と、本町1丁目の弁形で旧宮腰往還と交差、堀終端部は浅野川に接続しない。延長約3.2km。

内惣構は慶長4年（1599）、外惣構は同15年に築造

されたとされている。内惣構が築かれた時期は、徳川政権により加賀征伐が画策された時期にあたり、二代藩主前田利長は、母芳春院を人質として江戸入りさせる一方、惣構の築造を急いだ。慶長期惣構の史料として最古のものは、慶長6年9月5日付の前田利長が発給した知行宛行状にみられる「惣構屋敷」の記述である。これにより慶長6年以前に惣構の普請が開始されていること、(内)惣構内に相当量の材地があったことがわかる。慶長16年の「金沢屋敷割の定書」からは、惣構を境界とした町割りの整理・移動、堀2間の「土居の内道」の設置、土居に植えられた竹採取の規制が何處。文政7年（1824）の「金沢道橋概写」には江戸後期の惣構の構造や規模が記されており、堀幅を堀に架かる橋の渡し長、土居幅を土居内に埋められている悪水樋の長さにより求めることが出来る。

惣構の管理には町会所に惣構前番を置き、その配下に惣構橋番人および惣構番人を置いた。延宝8年（1680）の文献には、「道路并惣構奉行」という役職も見られる。文化9年の「御惣構等橋番人名帳」には、50人の惣構橋番人と、3人の惣構番人の名が見られる。「金沢惣構絵図」によると枯木橋・香林坊橋には橋及び木戸が設けられ、御礼札および賑託札が掲げられていた。

17世紀中頃に降、惣構の戦略上役割は失われたが、藩政期を通して堀と土居を維持管理する体制は続いた。惣構が都市計画上の境界線として、また封建的身分社会の中での新領域分限として位置づけられたことと、城下町内の衛生環境を守る排水路としての役割を担っていたためと考えられる。惣構の管理に関わる禁令は、慶長16年（1611）、慶安2年（1649）、寛延2年（1749）、宝暦5年（1755）、文政3年（1820）などが出されているが、堀の水質等管理状態の悪化が問題化していたようである。発掘調査によると推くとも17世紀末～18世紀初めには、堀が埋め始められ始めている。

文久3年（1863年）に惣構前番が廃止された。明治時代に入ると封建社会の崩壊と共に惣構は無用のものとされ、各所で土居が除去されて宅地開発や新道の築造が行われることとなり、その姿が急速に失われていった。

参考文献
木越隆三 2006 「金沢城内惣構の築造時期について」『岡國康編先古希記念論集 陶磁器の世界史』杜書房

第2章 西外惣構跡升形地点発掘調査

第1節 既往の惣構調査と復元整備

金沢市では、平成15年度から惣構跡の史跡指定および復元整備を視野に入れて、現況調査や発掘調査、史料等の収集等を行ってきた。平成17年度には西外惣構跡（武蔵町地点）、平成18～19年度には尾張町1丁目地内の東内惣構跡（枯木橋北地点）、平成20年度には西内惣構跡（主計町地点）、平成20～22年度には本町1丁目地内の西外惣構跡（升形地点）、平成21年度には西外惣構跡（本多町3丁目地点）で発掘調査を実施し、惣構の規模・構造の解明にあたり、平成19年度には、武蔵町地点と枯木橋北地点の調査成果および史料集を「金沢城惣構跡Ⅰ」として、平成22年度には主計町地点の調査成果を「金沢城惣構跡Ⅱ」として報告した。また、本事業以外にも、平成10～12年度に広坂遺跡の緊急調査で西外惣構跡の土層および内道、平成17年度には尾山神社前で西内惣構跡の堀、平成22年度には武蔵町地内の緊急調査で西外惣構跡の堀を確認している。

これらの調査成果を受けて、平成20年12月26日には堀跡の水路、内道および虎口、残存土層等が市指定史跡「金沢城惣構跡」となった。

平成20年度には西内惣構跡（枯木橋北地点）において、堀の段階的埋め立てを示す3列の石垣と土石垣・盛土を「東内惣構跡（枯木橋詰遺構）」として復元整備。平成21年度には西内惣構跡（主計町地点）において、素掘の堀跡を復元整備した。

第2節 位置と周辺環境

西外惣構は、金沢市南東方向の小立野台地裾部を起点とし、城の南側を東流して香林坊で北国街道と交差し、北上して宮腰往還と交差する升形に至り、本願寺金沢東別院南東角から北西に折れ、西流して浅野川に至る。

升形は、惣構が街道と交差する交通・軍事上の要衝に設けられた防御施設で、敵の侵入を防ぐために堀と土層を曲げてその内部に四角い空間をつくる。現、本町1丁目に地名が残る「升形」は、城下町の外港へと向かう宮腰往還が西外惣構と交差する地点に設けられ、金沢城下に現存する唯一の升形遺構である。

第3節 調査地周辺の城下絵図

調査地について、城下絵図で確認できるのは、寛文7年（1667）以降である。寛文7年金沢図（大図）（石川県立図書館蔵）では、「コ」の字に屈曲して升形を形成する堀と土層、升形内を屈曲して通過する道および橋が描かれ、升形内にはすでに地子町としての町屋が表現されている。土層は、西・北堀に沿うものほか、南堀東端突き当たりにも描かれてい

る。また、堀の外辺は外道に沿ってほぼ直線的だが、内辺は緩やかなカーブとして描かれている。寛文8年の「加賀国金沢之絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）は、やや図案化された描写で描かれており、升形内部の町屋の描写は見られない。「延宝金沢図」（石川県立図書館蔵）の描写は、寛文7年図によく似ている。文政期と考えられる「金沢地図」（金沢市立玉川図書館蔵）では堀幅が狭く、線形の「コ」の字で描写され、升形内部を通過する道も橋前後で幅狭されているもの、余り屈曲することなく通過するように描かれる。文化8年（1811）の「金沢惣構絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）には、線形で「コ」の字形の堀と北堀だけの幅の狭い土層、広見状に拡張した道路と「外形橋」、橋外側の木戸が描かれ、升形内道路北側には升形角部から「橋番人鶴屋孫左衛門」/後□（家カ）「同 山崎屋/丸兵衛」屋敷および町家、道路南側には町屋と思われる2軒分の敷地割が描かれる。また、同年の「金沢町絵図（安江木町・北六枚町・田丸町・鍛冶片原に町等絵図）」（金沢市立玉川図書館蔵）では、やや幅の広い西堀と幅の狭い北堀、西堀および北堀の角部1軒間分の堀石垣、道幅が広がらずに屈折して升形を通過する道路、升形橋外側の木戸および番所の描写がみられ、升形内道路北側には升形角から2軒の「惣構」の屋敷および町屋「ニ（朱文字）〇〇屋〇〇」]、「ニ（朱文字）脇田屋和右衛門」の表記がある。また、升形橋北東詰には共同井戸および西堀に渡された懸橋と思われる描写、升形南堀には、堀対岸の各町屋から渡された私有橋とおもわれる5本の細い橋が描写されている。「金沢町名帳」（金沢市立玉川図書館蔵）にある「御惣構等橋番人名帳（文化9年）によると、升形橋々番人は、「銭屋小原商売 山崎屋 丸兵衛」と「懸ぬい職 鶴屋孫三郎後家」となっている。

第4節 調査の経緯・概要

平成20年度ははじめ、本町1丁目地内に開発行為が計画された。開発行為は近隣に計画されたマンション予定地に現在居住している住民のための代替地として、当時時間帯貸し駐車場となっていた「升形」推定地を宅地開発するというものであった。本市では城下町金沢の世界遺産登録を目標として様々な施策を推進しているが、惣構跡は城下町における歴史遺産の中でもとくに重要な位置づけとなっており、「升形」は市内で唯一遺構が残存している可能性が高い惣構の升形推定地であったため、開発計画からの保護を検討することとなった。

まず、遺構の残存状況を確認するため、同年7月28日～8月8日に「T」字形の試掘坑（約40㎡）を掘削した（第1次調査）。結果、試掘範囲内で西・北堀

跡、素掘りの堀土居岸、堀土居側の石垣、土居盛り基部、礎石建物等が確認され、升形推定地に良好な状態で遺構が残っていることが確認された。これを受けて、市は開発者に対して、居住代替地を升形推定地以外に変更するよう調整を開始した。さらに、升形遺構を保存活用していくために、平成21年度以降、市有地として買取する計画を策定した。

平成21・22年度には、市有地として買取した範囲において、升形遺構を復元整備するための基礎資料となる惣構遺構の規模・形態や歴史の変遷を明らかにする目的で発掘調査を実施した。平成21年度調査は5月27日～7月27日に実施し、平成20年度調査区を取り囲むように「コ」の字形の調査区(約190㎡)を設定し、升形の角部分を中心とした西堀と北堀、堀内側の升形土居基部の南端部、升形内に建てられた礎石建物跡を確認した。平成22年度調査は11月22日～12月21日に、平成21年度調査区の東側延長部分(約100㎡)を対象に実施し、北堀の下流部分と升形内部の建物跡を確認した。

発掘調査終了後の埋め戻しは山砂で行った。将来の復元整備に備えて、石垣・礎石等遺構部分には、山砂で40cm覆った上で約40cm上方にポリエチレン製帯状シート(埋設管表示用シート)で遺構の所在位置を表示した。

調査日誌抄

第1次調査

平成20年7月28日 表土除去
7月29日 発掘作業開始 発掘調査補助員5名
7月30日 グリッド杭設定

8月6日 写真測量

8月7～8日 埋め戻し

第2次調査

平成21年5月27～29日 表土除去

6月1日 発掘作業開始 発掘調査補助員11名

6月8日 グリッド杭設定

6月17日 西堀埋土から「萬延年製」碗出土

6月24日 用水・惣構堀検討部会視察

6月25日 平面写真測量

7月4日 現地説明会

7月6～7日 西堀南端サブトレンチで堀底面確認

7月14日 石垣立面写真測量

7月25～27日 埋め戻し

第3次調査

平成22年11月18日 表土除去

11月22日 発掘作業開始 発掘調査補助員10名

12月2日 グリッド杭設定

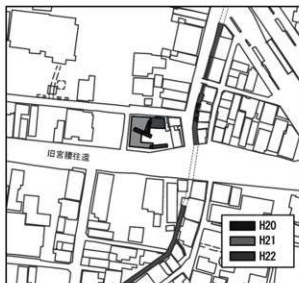
12月11日 現地説明会

12月13日 平面写真測量

12月20～21日 埋め戻し



第1図 西外惣構跡升形地点 調査位置図



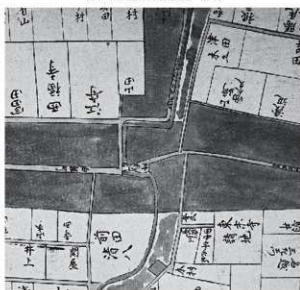
第2図 調査区配置図



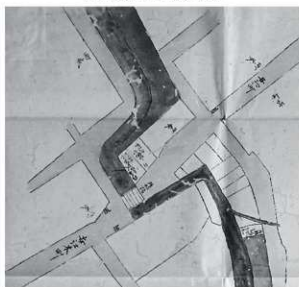
図版1 寛文7年金沢図(大図)
(石川県立図書館蔵)部分



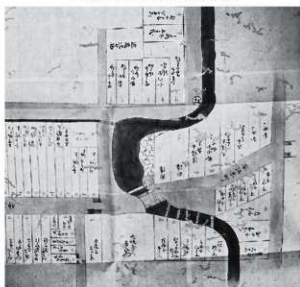
図版2 延宝金沢城下
(石川県立図書館蔵)部分



図版3 金沢地図(文政期・榎橋弥三郎)
(金沢市立玉川図書館蔵)部分



図版4 金沢物構絵図(文化8年)
(金沢市立玉川図書館蔵)部分



図版5 金沢町絵図(文化8年)
(金沢市立玉川図書館蔵)部分

第5節 遺構

1. 調査の方法

グリッド杭は、調査地内を公共測量規定に基づいた10m格子で区切りその交点上に杭を設置し、北西角の交点をA1杭として東方向にA2、A3、南方向にB1、C1と変遷させて杭名とした。遺構の所在位置(発掘区)は、北東角の杭名で示す。

掘削機による表土除去の結果、地表下約25～35cmにおいて江戸時代の遺物包含層を検出したため、この層位以下は手作業での掘削作業とした。

2. 遺構の概要

検出した遺構の計測値および遺構方位等詳細は第1表に示した。本稿では遺構変遷を中心に記述する。

時期区分

遺構変遷の二期としてⅠ～Ⅶ期を設定した。Ⅰ期は西外惣構構築初期の段階である。Ⅱ期は昇形の土居内部に土坑が掘削され町屋が建ち始めたものと推定される初期の段階である。Ⅲ期は絵図に描かれた初期の段階で既に昇形内に町屋が建っていたと考えられる段階である。Ⅳ期は西堀南西部の西面にSA203南側、北面にSA211を築造し、堀を埋め立てた段階である。Ⅴ期には北面のSA211北側にSA210を構築し、西面のSA203を北側に伸ばして西堀をさらに北側へ埋め立てた段階である。Ⅵ期は北面のSA210北側にSA209・SA222、西面にSA204を築いて埋め立て地を北に広げ、昇形北西角を全て石垣とした段階である。Ⅶ期は溝SD201と溝SD202を残して堀全体が埋め立てられた段階である。

昇形隅部の変遷

Ⅰ期～Ⅳ期は、西堀南側(昇形橋側)で埋め立てが進み、Ⅳ期には石垣が築かれたが、昇形隅部は土塊の状態であった。Ⅰ期(構築当初)の昇形隅部はA3区とB3区の境界付近で基盤となる粘土層を削った斜面として確認され、隅部はやや鈍角で緩やかなカーブを描く。Ⅰ期土居側斜面について北端では第4図A-A'断面のA・17層と18層境界(傾度約35°)、B-B'断面の19～21層下面(傾度約40°)、第6図T-T'断面の11～15層下面(傾度約42°)、U-U'断面のSA217北側(傾度約42°)で、西端ではC-C'断面の19～20層下面(傾度約35°)で確認された。Ⅴ期になると北堀のⅠ期堀部の延長線に近い位置にSA210が築かれ、昇形北西隅部は約5.7m西縁側へ延長され、SA210西端部とSA204南側北端部の交点付近になる。さらにⅥ期では北堀にSA209とSA222が築かれ、西堀ではSA204が北へ約2.8m延伸され、SA209西端部とSA204北端部の交点が昇形北西隅部となる。Ⅶ期の昇形隅角石は、Ⅶ期に堀が埋め立てられ、西堀石垣が溝SD201・202の隅石に転用されたときに温存された。隅角石は築石部と同じ安山岩質の野石(川原石)を使用しているが、石材の大きさが長さ約40～45cm、幅約30cm、厚さ約25cmと築石部より大粒で、細長い枕形もしくは直方体を呈しており、長手を左右に振り分けて積み算木積み

の技法で3段分積み上げ、短辺の石面を削り取って隅石部の小口を揃えている。Ⅳ・Ⅴ期の隅角石は抜き取れているとみられる。

西堀の変遷とSD201

西堀南端部付近のⅤ期堀底において約1.1×1.3m四方の堀底サブトレンチを掘削し、西堀における第Ⅰ期(構築当初)の堀底の確認を行ったところ、昇形内部の第Ⅱ期生活面からみて比高差で約3mの深さの位置で無遺物のややしまった砂層を確認した。直上までの堆積層では、17世紀初頭の陶磁器片を確認したことから、第Ⅰ期の堀は深さ約3mであったと推定される。また、C3区SK203南西側やSA221下からA3～B3区では基盤層を掘って構築したⅠ期土居側斜面を確認しており、Ⅰ期の西堀幅は道路際の敷地境界までで約11mとなる。Ⅱ～Ⅲ期の西堀岸の変遷は明確でない。Ⅳ期石垣のSA203南側背面でⅠ期以降の埋め立て地となったB2区、C2区、C3区において、上層遺構を保護するため、充分な試掘坑を設定できなかったためである。

Ⅳ期には西堀南西部においてSA203南側を西面とし、SA211を北面として堀の埋め立てを行った。さらにⅤ期には北面のSA211北側にSA210を構築し、西面のSA203を北側に伸ばして西堀をさらに北側へ埋め立てた。そしてⅥ期には北面のSA210北側にSA209・SA222、西面にSA204を築いて埋め立て地を北に広げ、昇形北西角を全て石垣とした。また、SA204南側とSA203北端はSA205で緩やかにつながれているが、SA205下端の高さからⅤ期中に施工されたと推測される。SA203・SA204で囲まれた内角部分の水流の停滞を改善する意図があったのであろうか。Ⅶ期にはSA204北端の昇形隅石から北側にSA208を継ぎ足し、また、SA208・SA204・SA205・SA203に対してSA207・SA206を築き、幅0.7mの溝SD202と幅0.5mの溝SD201を残して残りの西堀を全て埋め立てた。西堀石垣のⅣ・Ⅴ期隅角石は抜き取られたと考えられるが、抜き取りの際に附いた築石が積み直しされたとみられ、Ⅳ～Ⅵ期にかけての石垣の境界が不明確となっている。しかし、北堀石垣の位置に対応して西堀石垣下端の高さが段階的に浅くなっていることから、西堀石垣の変遷を追うことが出来る。SA203南側下端には針葉樹の角材による約9cm角の根太を認めることができ(F-F'断面)、SA211以北のSA203北側下端より約50cm低い。SA204下端はSA203北側下端より約10cm高い。明治期の溝の石積SA208下端はSA204よりも約25cm高い。よって、堀石垣から推測できる堀深さはⅣ期が約1.5m、Ⅴ期が約1m、第Ⅵ期が約90cm、Ⅶ期の溝SD201・SD202の深さは約65cmとなる。また、SA203ではSA211以南・以北ともに石材の野石(川原石)の大きさが小さく、奥行きを長手として乱積み風に積み、石面は突出部を欠きとる程度に調整している。SA204では幅約30cm、高さ約20cm、長さ約20～25cmの粒が揃った石材を石

面を長手として横目地を揃えるように積み上げている。SA205はやや乱雑に積み上げられており横目地は通らない。SA208は、杭とSA204と比較して最下段は同等程度の大きさの石材だが2段目以上はやや小粒で、横目地を意識して積み4段目で天場を揃える。

第5図F-F'断面74～76層上面はⅥ期末の堀底、63～77層はⅦ期の堀埋土、45・46層はⅦ期のSD201掘方、47～50層はSD201埋土、第7図Y-Y'断面19・20層上面はⅥ期末の堀底、10～18層はⅦ期の堀埋土、5～7層はⅦ期のSD201埋土、Z-Z'断面20層上面はⅦ期末の堀底、13～18層はⅦ期の堀埋土、12層はⅦ期のSD202掘方、7～11層はSD202埋土である。

北堀の変遷

西堀内に構築されたSA211、SA210は北側を面としており、北堀のSA209・SA222へと変遷するため、北堀石垣として触れる。西堀における埋め立てに伴い、SA211→SA210→SA209・SA222と変遷する。SA211は長さ約3.5m、高さ約0.55mの石垣で、大小の野石を奥行を長手とし、やや横目地を意識しながら3段まで積み上げている。確認できる34個の石面はすべて無調整である。SA210は長さ2.45m、高さ1.0mの石垣で、大小まばらな野石を石面を長手として乱層積みで6～7段まで積み上げている。確認できる53個中5個が石面を大きく削り取る調整、7個が突出部を欠きとる調整を施している。このほか、板状の小粒な岩間詰め石が10個、上端に近い位置に凝灰岩質切石が1個ある。SA209は長さ約6m、高さ約1.0mの石垣で、隅角石から約3mまでの最下段に幅約40～60cm、厚さ約25～30cmの大型の石材を並べ、幅約25～30cm、厚さ約15～20cmの粒か揃った野石を横目地を揃えて積んでいる。西端部は面を削り取った野石による隅角石としており、東端部は幅約45cm、厚さ20cmのやや大振りな石材を4段積み上げて側面を斜面として終端させ、SA222はその上に積み足されている。確認できる築石部の111個中42個の石面は無調整で、50個が石面を大きく削り取り、5個が突出部を欠きとり、8個の小石の岩間詰め石がある。また、隅角石の控え天場には凝灰岩質切石が置かれている。SA222は長さ1.85m、高さ0.7mの石垣で、SA211の東端部側面から積み足され、東側に向かって高さが低減する。大小の石が入り混じり上部ははらみ堀様に傾斜している。19個中11個が石面を大きく削り取っている。

北堀東(下流)側でのⅠ期土居側堀岸斜面は、第12図サ・サ'断面、第7図b-b'断面17・21・22層下面(傾度36°)・c-c'断面(傾度約40°)として認めることができる。Ⅳ期以降、西堀においては石垣の築造を伴う段階的埋め立てを認めることが出来るが、北堀においてはSA209・SA222構築までは基本的に土砂による埋め立てが進んだものと思われる。北堀東側ではⅡ～Ⅵ期に該当すると考えられる漸次的な土居岸部の埋没を認めることが出来るが、現在遺物整理段

階にあるため、詳細な変遷を追うことが出来ない。この北堀東側では、堀底に杭を2本ずつ乃至ジグザグに打ち込み、杭で挟み込むようにして針葉樹板を立てかけて土留めとし、Ⅴ期までにSA209・SA222の延長線上を上場とする位置まで埋め立てられている。Ⅵ期末すなわち北堀が埋められる直前の土居側堀岸の形状は、第7図a-a'断面・7層(堀岸埋土)と2・5・6層(堀埋め立て土)との境界(上部傾度約66°、下部傾度約25°)、b-b'断面14～16層(堀岸部の埋土)および10～13層(堀底の堆積土)と5～9層(堀埋め立て土)との境界(傾度約85°)が示している。このことから、b-b'断面においてⅠ期からⅥ期末までの間に土居盛土基部の標高において北堀幅が約2.6m狭まっている。

第6図W-W'断面8～10上面はⅦ期末の堀底、2～7層はⅦ期の堀埋土、第7図a-a'断面7・8層上面はⅥ期末の堀底、1～6はⅦ期の堀埋土、b-b'断面14～22はⅥ期末までの堀埋土、10～13はⅦ期末の堀底、4～9はⅦ期の堀埋土である。

土居跡

土居盛りは第6図T-T'断面12・13層、第7図b-b'断面23・24層で、b-b'断面では基礎となる粘土層から約50cmの厚さが2.2m幅以上の範囲で残り、堀側の傾度が約55°であることを確認した。b-b'断面2層は埋土4掘り方である。

建物跡

升形内部にあたるC4区では、多数の柱穴と礎石が検出された。調査範囲が狭小なため建物形状が不明なものが多いが、柱間1間(約1.05m)以上×1間(約0.95m)以上の礎石建物SB401と、柱間推定2間以上×1間以上の礎石建物SB402(約1.85m以上×0.9m以上)を検出した。

Ⅳ期にはSA203南側およびSA211を構築し西堀南西部を埋め立て、その上に礎石建物SB201を建てた。SB201は約2.85m×約4.2m以上を測り東西方向が柱間3間(各約0.95m)、南北方向が柱間推定4間(各約1.05m)以上である。

Ⅴ期には埋められた西堀上に礎石建物SB203～SB205、北堀上に礎石建物SB202・土台建物SB208(SA214・SA212・SA301)を建てた。礎石SB203-3には墨書があり、礎石SB204-4には○に十字線の柱位置が墨入れされていた。A3・B3区にはSA216・SA215・SA217を土台とするSB206が建てられている。礎造りの建物であろうか。また、B2・C2区のSA203上から東側にかけてSA202・SA213を土台とする建物SA202が建てられている。

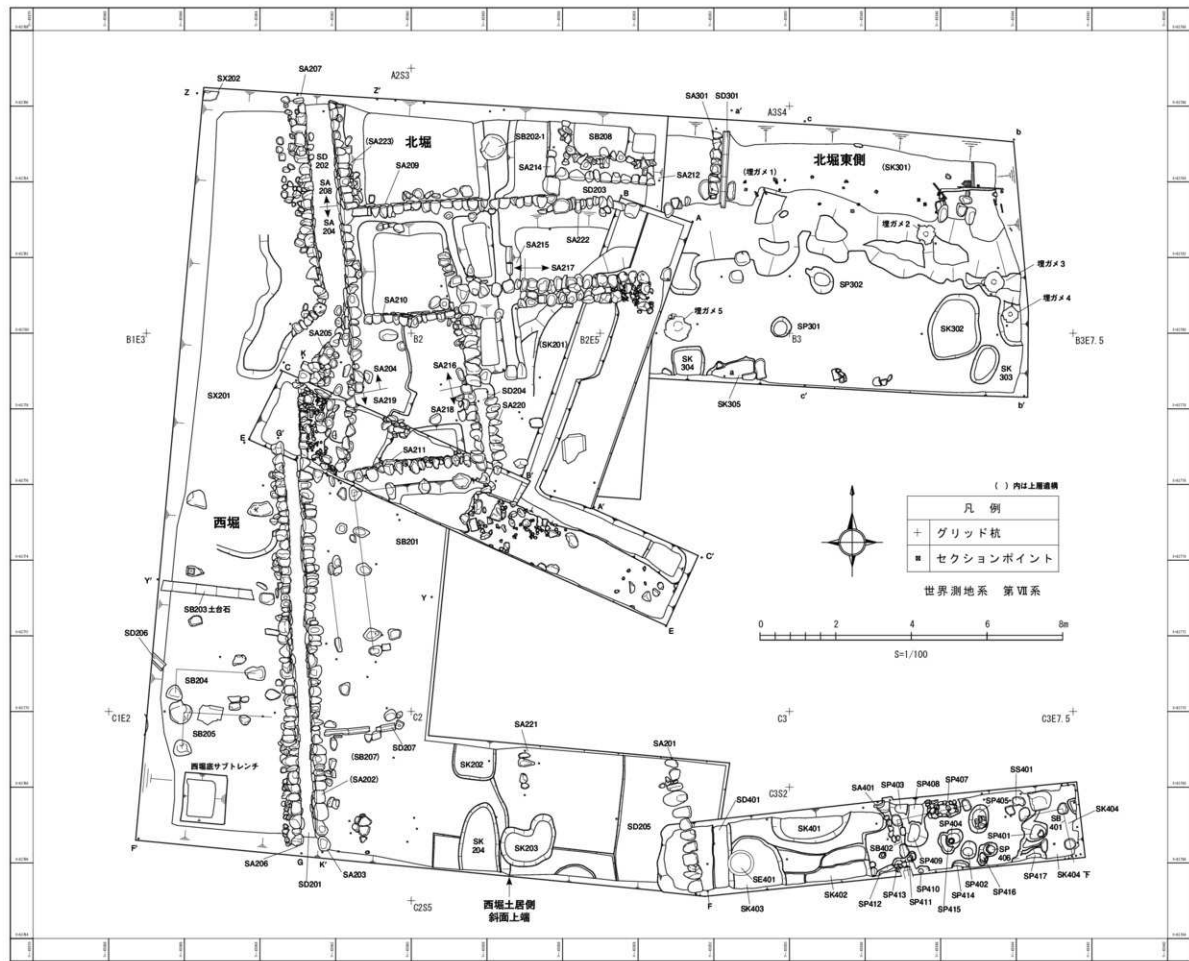
SK202、埋土1～5は、升形内の建物裏手およびⅣ期以降堀跡上に建てられた家屋に付属する埋土である。埋土1を除き越前甍で、内面に灰白色の付着物が付着し便所甍と考えられる。

第1表 遺構一覧表

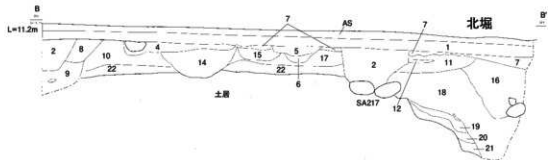
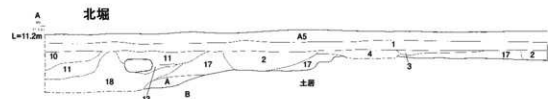
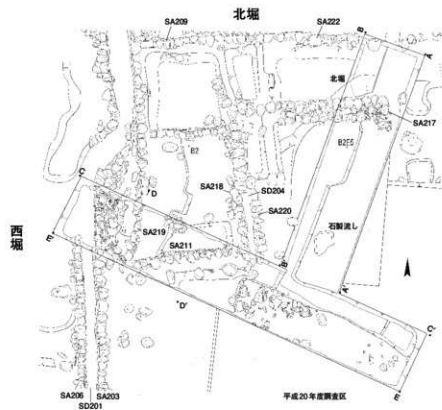
〔注〕付の記載は最も小規模な遺構に基づき

遺構名	遺構区	平面形状	土輪方向 参照北中心	遺構幅 1	遺構長さ 1	遺構幅 2	遺構長さ 2	遺構 高さ (m)	備考	時期	遺構関係
SK20	B3	不明	-	-	-	-	-	-	土層遺構	-	-
SK20	C3	(古形)	-	西北西 東南東	1.1	北北東 南南西	10.9	-	北以区外	-	-
SK20	C3	不整形	-	西北西 東南東	1.4	北北東 南南西	1.0~1.4	-	区外	-	-
SK20	C3	(長方形)	-	東西	1.2	南北	1.8	-	南以区外	-	-
SK30	A4	不明	-	-	-	-	-	-	北壁東側に土間石土層出土	前期	-
SK30	A4+B4	不整形	-	東西	1.4	南北	1.7	0.37	-	-	-
SK30	B4	長方形	-	西北西 東南東	0.6	北北東 南南西	1.0	0.38	-	-	-
SK30	B3	(古形)	-	東西	0.85	南北	0.73	0.45	南以区外	-	-
SK35	B3	-	-	西南西 東北東	1.1	北北西 南南東	0.5	0.48	南以区外	-	-
SK40	C3+C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	2.1	北北西 南南東	0.7	0.55	北以区外	第11期	-
SK42	C4	(長方形)	-	西南西 東北東	1.2	北北西 南南東	0.83	0.75	南以区外	第11期	-
SK43	C3	(楕円形)	-	西南西 東北東	1.3	北北西 南南東	1.1	0.56	S301(東方)、南以区外、西以SD4H	前期	第11期
SK44	C4	長方形	-	北北西 南南東	1.8	北北東 南南西	1.2	1.0	南北一帯以区外	第11期	-
SK31	B2	不明	-	東西	1.2	南北	1.70	-	西壁に土間石土層出土	前期	-
SK32	A2	残壁	-	直壁	0.4	-	-	0.3	土層欠損	-	-
残壁1	A3	残壁	-	-	-	-	-	-	土層欠損	前期	第13期
残壁2	A4	残壁	-	直壁	0.53	-	-	0.3	土層欠損	中～前期	第13期
残壁3	A4	残壁	-	直壁	0.4	-	-	0.25	土層欠損	中～前期	第13期
残壁4	A4	残壁	-	直壁	0.43	-	-	0.17	土層欠損	第13期	-
残壁5	A3+B3	残壁	-	直壁	0.4	-	-	0.55	土層欠損	中～前期	第13期
SD41	C3	円形 礎石遺構	-	西	0.7	内径	0.55	0.6	-	前期	第11期
SP33	A3	楕円形	-	東西	0.5	南北	0.53	0.36	-	-	-
SP32	A4	楕円形	-	北西 南東	0.7	北北東 南南西	0.6	0.33	-	-	-
SP43	C4	(楕円形)	-	西北西 東北東	0.7	北北東 南南西	0.55	0.7	礎石あり	第11期	-
SP42	C4	(楕円形)	-	東西	0.4	南北	0.5	0.45	礎石あり	第11期	-
SP43	C4	(楕円形)	-	東西	0.5	南北	0.5	0.3	北以区外、東以SP40B	第11期	-
SP44	C4	(楕円形)	-	東西	0.5	南北	0.45	0.5	南西以SP415	第11期	-
SP45	C4	(楕円形)	-	東西	0.5	南北	0.75	0.6	礎	第11期	-
SP46	C4	(楕円形)	-	東西	0.5	南北	0.35	0.5	南西以SP416	第11期	-
SP47	C4	(長方形)	-	西南西 東北東	0.85	北北西 南南東	0.45	0.3	礎	第12期	-
SP46	C4	(楕円形)	-	西北西 東北東	0.53	北北東 南南西	0.5	0.3	北以区外、西以SP40B、南以SP409	第11期	-
SP49	C4	(楕円形)	-	東西	0.6	南北	0.6	1.0	北以SP409	第11期	-
SP410	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	0.35	北北西 南南東	0.2	0.1	南以区外	第11期	-
SP411	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	0.3	北北西 南南東	0.2	0.3	南以区外、西以SP413	第11期	-
SP42	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	0.65	北北西 南南東	0.27	0.1	南以区外、東以SP413	-	-
SP43	C4	(円形)	-	西南西 東北東	0.25	北北西 南南東	0.14	0.3	南以区外、東以SP412、西以SP411	第11期	-
SP44	C4	(楕円形)	-	東西	0.45	南北	0.35	0.35	南以区外	第11期	-
SP45	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	0.35	北北西 南南東	0.6	0.1	北東以SP404	第11期	-
SP46	C4	(楕円形)	-	西北西 東北東	0.24	南南西 北北東	0.32	0.45	礎石あり	第11期	-
SP47	C4	(楕円形)	-	西南西 東北東	0.39	北北西 南南東	0.5	0.4	南以区外	第11期	-
SD31	B2+C2	石積壇	30° 西	北北西 南南東	1.25	西南西 東北東	0.5	0.95	南以区外、北以SD32、北西以SS201 石積	前期	第5~7期
SD32	北壁	石積壇	54° 西	北北西 南南東	5.6	西南西 東北東	0.7	0.6	北以区外、南以SD33、南西以SS201 石積	前期	第5~7期
SD33	南壁	石積壇	47.2° 北	北東 南西	2.2	北西 南東	0.7	0.65	-	前期	第5期
SD33	A3	石積壇	57° 北	西北西 東北東	2.5	北北東 南南西	0.35	0.35	北東以SD32、西以不明	前期	第10期

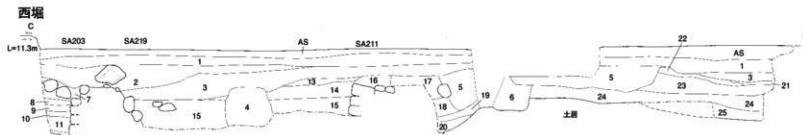
邊境名	調查區	平面坐標	上邊境界面標記北方向	距離方位	距離標	距離方位	距離標	邊長(公尺)	備 考	時期	邊境種類
SD28	R3	石碇溪	11.3° W	西北西 西南東	2.3	西南西 東北東	0.25	07	西邊SA216, 東邊SA220	定期	第 8 - 9 期
SD26	C3	東湖溪	5.2° E	南	3.3	東	1.0	0.55	南邊以區界	定期	第 8 期
SD26	R2	福山石 石碇	45.9° W	北	0.4	北西 南東	0.2	-	北邊以區界	定期	第 8 期
SD27	C2	福山石 石碇 2 段	3.7° W - 108° W	西南西 東北東	1.87	北北西 南南東	0.17	0.3	-	定期	第 8 期
SD30	A3	福山石 石碇	3.3° E	南	2.0	東	0.17	0.13	北邊以區界	定期	第 7 - 10 期
SD40	C3	東湖溪	2.7° W	北北西 西南東	1.7	西南西 東北東	0.55	0.4	南邊以區界	定期	第 11 期
SA20	C3	東北北二面	12.0° W	北北西 西南東	(3.6)	-	-	0.22	北邊以區界	定期	第 12 期
SA20	R2 + C2	上仔山			(4.4)	-	-	0.33	SD27 西邊	定期	第 8 期
SA20	北側	西麓石碇 西南西二面	0.1° W	北北西 西南東	(9.8)	-	-	1.0	SA211 以北, SD204 東側 C 面, 北以 SA205	定期	第 5 期
SA20	南側	西麓石碇 西南西二面	3.0° W	北北西 西南東	2.9	-	-	1.95	SA211 以南, SD204 東側 C 面, 南以區界	定期	第 5 期
SA204	R2	西麓石碇 西南西二面	4.6° W	北北西 西南東	3.0	-	-	0.65	SD201 東側 C 面, 北以石碇石仔 SA208 砂岩, 南以 SA205 砂岩	定期	第 5 期
SA204	北側	A2 + R2								V 期	
SA205	A2 + R2	SD202 南東側 北西一面	40.7° E	西南 北東	1.03	-	-	0.8	北以 SA204 砂岩, 南以 SA203	V - 定期	第 3 期
SA206	R2 + C2	SD203 西側 東北北二面	2.9° W	北北西 西南東	11.0	-	-	0.95	南以區界, 北以 SX201 砂岩守礦線	定期	第 5 期
SA207	北側	A2	SD202 西側 東北北二面	6.0° W	北北西 西南東	5.5	-	0.65	北邊以區界	定期	第 5 期
SA207	南側	A2	SD202 北西側 南南東二面	30.9° E	西南 北東	1.3	-	0.45	南以 SX201 砂岩守礦線	定期	第 5 期
SA208	A2	SD202 東側 西南西二面	6.8° W	北北西 西南東	(2.9)	-	-	0.75	北以區界, 南以 SA201 - SA209 砂岩	定期	第 5 期
SA209	A2 - A3	SD202 東側 西南西二面	3.8° W	北北西 西南東	6.0	-	-	1.0	西以石碇石仔, 東以 SA222	定期	第 6 期
SA210	A2 - A3	北麓石碇 北北西二面	3.1° W	西南西 東北東	2.45	-	-	1.0	西以 SA204, 東以 SA216	V 基	第 10 期
SA211	R2 + R3	北麓石碇 北北西二面	4.5° W - 121° W	西南西 東北東	3.35	-	-	0.55	西以石碇 (穴痕小), 東以 SA218	定期	第 6 - 6 期
SA212	A3	SD203 上仔石 碇南西二面	3.5° E	北北西 西南東	2.65	-	-	0.2	SD203 北側, SD206 南邊, 西以不明	定期	第 10 期
SA213	R2 + C2	上仔石 北北西二面	3.0° W	西南西 東北東	2.5	-	-	0.37	SD27 北邊, 東以區界	定期	第 8 期
SA214	A3	上仔石 西一面	3.3° E	南	1.2	-	-	0.3	SD209 西邊, 北以區界	定期	第 10 期
SA215	A3	上仔石 北北西二面	1.8° W	西南西 東北東	1.4	-	-	0.25	SD206 北邊北西側, 東以 SA217	V 期 - 定期	第 6 - 9 期
SA216	A3 + R3	上仔石 西南西二面	6° W	西南西 東北東	2.7	-	-	0.45	SD209 西邊, 南以 SD204 砂岩	V 期 - 定期	第 6 - 9 期
SA217	A3	上仔石	3.5° W	西南西 東北東	3.4	北北東 西南西	0.75	0.55	SD206 北邊北東側, 西以 SA215, 東以不明	V 期 - 定期	第 6 - 8 - 9 期
SA218	R3	SD204 東北北二面	11.3° W	北北西 西南東	2.65	-	-	0.7	SD204 南側, 北以 SS216 - SA217, 東邊不明	V 期以降	第 6 - 8 - 9 期
SA219	R2	林林寮	0.5 - 103.5° E	西南西 東北東	2.0	-	-	0.4	北以 SA204	V 期	第 8 期
SA220	R3	SD204 西南西二面	5.7° W	北北西 西南東	2.0	-	-	0.25	SD208 東側, 南邊以砂線	V 期以降	第 6 - 6 期
SA221	C3	西一面	4.8° W	南	0.9	-	-	0.15	上置礦的土壁砂石小, 鄰近砂岩置礦的上置礦 砂岩砂石	定期以降	第 12 期
SA222	A3	北麓石碇	3.6° W	東	1.85	-	-	0.7	西以 SA209, 東以砂線	定期	第 6 - 10 期
SA223	A2	上仔石 西二面	6.0° W	南	1.15	-	-	0.2	南邊以 SD202 砂岩	定期	第 10 期
SA30	A3	上仔石 西二面	4.3° E	南	(0.7)	-	-	0.3	北邊以區界	定期	第 10 期
SA40	C4	石碇	16.5° W	北北西 西南東	0.75	-	-	0.07	-	定期	第 11 期
SD30	R2 + R3	雙獅潭石	7.0° W	西南西 東北東	2.85	北北西 南南東	(4.2)	-	-	定期	第 9 期
SD32	A2 - A3	雙獅潭石	2.2° W	北北西 西南東	4.5	北北東 西南西	(3.6)	-	-	定期	第 10 期
SD33	R2	雙獅石台 石碇	5.6° E	北北西 南南東	(2.95)	北北西 西南西	(2.4)	-	-	定期	第 8 期
SD33	R2	福山石 石碇	5.6° E	北北西 南南東	2.5	北北東 西南西	0.25	0.15	-	定期	第 7 - 8 期
SD34	R2	雙獅潭石	1.0° E	北北西 西南東	(2.9)	北北東 西南西	(0.95)	-	-	定期	第 8 期
SD35	R2 + C2	雙獅潭石 石碇	1.0° E	北北西 西南東	1.8	北北東 西南西	0.9	-	-	定期	第 8 期
SD36	A3 + R3	雙獅石台	5.0° W	西南西 東北東	5.1	北北西 西南東	2.7	-	西邊 SA216, 北邊 SA216 - SA217, 東邊不明	定期	第 9 期
SD37	C2 + C3	雙獅石台	3.0° W	西南西 東北東	(3.0)	北北西 西南東	(3.7)	-	西邊 SA202, 北邊 SA213, 東邊不明	定期	第 8 期
SD38	A3	雙獅石台	4.0° E	北北西 西南東	(2.9)	北北東 西南西	(1.5)	-	南邊 SA212, 西邊 SA216, 北以區界, 東以不明	定期	第 6 - 10 期
SD40	C4	雙獅潭石	7.0° W	西南西 東北東	(1.0)	北北西 西南東	0.95	-	-	定期	第 12 期
SD42	C4	雙獅潭石	12.0° W	西南西 東北東	(1.85)	北北西 西南東	0.9	-	-	定期	第 12 期



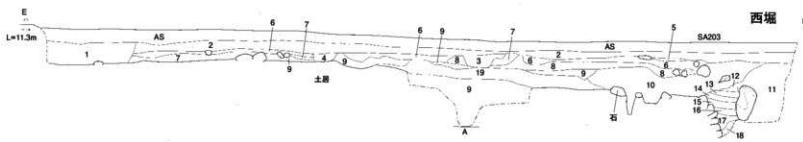
第3図 全体遺構図



- A-A断面・B-B断面共通
1. 砂石
 2. 10cm厚砂層
 3. 10YR8/3黄褐色砂(早稲)
 4. 溝
 5. 10YR4/1黄褐色砂土(灰多)(早稲)
 6. 10YR2/1黒褐色砂土(灰多)(早稲)
 7. 22Y2/2黒褐色砂土+10YR4/2黄褐色砂土(灰少)(早稲)
 8. 10YR8/6黄褐色砂土(灰濁)(早稲)
 9. 10YR4/3黄褐色砂土(灰土含)(早稲)
 10. 10YR1/1黒褐色砂土(灰少)+5cm未満層(地山ブロッコ少量入, 早稲)
 11. 10YR2/3黒褐色砂土(灰少)(地山ブロッコ少量入, 早稲)
 12. 10YR2/6黄褐色粘土
 13. 溝
 14. 10YR4/3黄褐色砂土(灰多)(早稲, 柱礎)
 15. 10YR4/3黄褐色砂土(灰多)(地山ブロッコ混入, 早稲)
 16. 10YR2/3黒褐色砂土(灰多)(早稲)
 17. 10YR1/1黒褐色砂土(灰少)(地山ブロッコ少量入, 早稲)
 18. 10YR2/3黒褐色砂土(灰多)+5-15cm層(早稲, 灰で残分含む)
 19. 10YR2/3黒褐色砂土(灰濁)+5cm未満層(早稲)
 20. 10YR1/1黒褐色粘土(早稲)
 21. 10YR4/3黄褐色粘土(早稲)
 22. 10YR1/7黒褐色砂土(灰濁)(地山ブロッコ混入, 柱礎)
- A. 10YR2/6黄褐色粘土
B. 10YR8/6黄褐色粘土



- C-C断面
1. 砂石
 2. 概瓦(ボタ丸型・フタ型ナシ)
 3. 25Y2/2黒褐色砂土(灰濁)
 4. 10YR4/3黄褐色砂土(10cm未満)(早稲, 灰貯層面付)
 5. 10cm以上土層
 6. 10-30cm厚砂層
 7. 10YR8/3黄褐色砂土
 8. 10YR6/3黄褐色砂土
 9. 10YR8/3黄褐色砂土
 10. 10YR8/3黄褐色砂土
 11. 10YR2/1黒褐色粘土
 12. 概瓦(ボタ丸型・フタ型ナシ)
 13. 25Y2/2黒褐色砂土(10cm未満)(早稲)
 14. 10YR4/3黄褐色砂土(10cm未満)(早稲)
 15. 10YR4/3黄褐色砂土(灰濁)+10cm層(早稲)
 16. 10YR4/3黄褐色砂土(灰濁)+10cm未満層(早稲)
 17. 10YR4/3黄褐色砂土(灰濁)+5cm未満層(早稲)
 18. 10YR1/1黒褐色砂土(灰濁)+10cm未満層(早稲)
 19. 10YR2/3黒褐色砂土(灰少)+5cm未満層(早稲)
 20. 10YR8/6黄褐色砂土+1.5m層(早稲)
 21. 10YR4/3黄褐色砂土(灰少)(地山ブロッコ混入, 早稲)
 22. 10YR2/3黒褐色砂土(灰少)(地山ブロッコ少量入, 早稲, 22より高い)
 23. 10YR1/1黒褐色砂土(灰濁)(地山ブロッコ混入, 柱礎, 灰貯層面付)
 24. 10YR1/7黒褐色砂土(灰濁)(地山ブロッコ少量入, 柱礎)
 25. 10YR1/7黒褐色砂土(灰濁)(地山ブロッコ少量入, 柱礎)

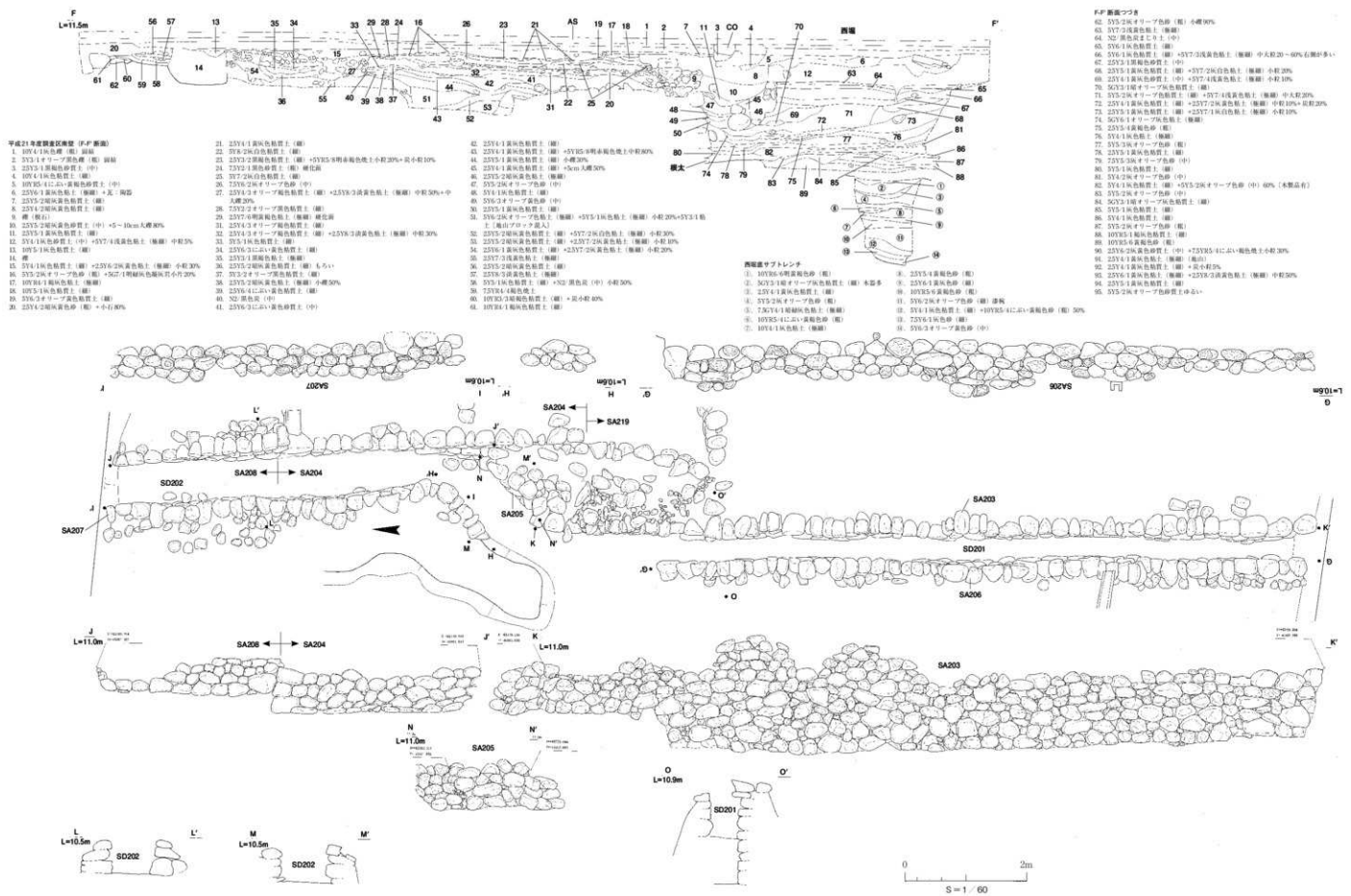


- D-D断面
1. 砂石
 2. 概瓦(ボタ丸型・フタ型ナシ)
 3. 25Y2/2黒褐色砂土(10cm未満)
 4. 10YR4/3黄褐色砂土(10cm未満)
 5. 10YR4/3黄褐色砂土(灰濁)+10cm層(早稲)
 6. 10YR4/3黄褐色砂土(灰濁)+10cm未満層(早稲)
 7. 10YR4/3黄褐色砂土(灰濁)+5cm未満層(早稲)
 8. 10YR1/1黒褐色砂土(灰濁)+10cm未満層(早稲)
 9. 10YR2/3黒褐色砂土(灰少)(地山ブロッコ混入, 早稲)
 10. 概瓦(ボタ丸型・フタ型ナシ)
 11. 10YR2/2黒褐色砂土(10cm未満)
 12. 10YR8/3黄褐色砂土
 13. 10YR8/3黄褐色砂土
 14. 10YR8/3黄褐色砂土
 15. 10YR8/3黄褐色砂土
 16. 10YR2/1黒褐色粘土
 17. 10YR2/1黒褐色粘土
 18. 10YR2/1黒褐色粘土
 19. 10YR7/3黄褐色砂土(早稲)
 20. 10YR4/3黄褐色砂土(灰多)(早稲, C-C断面の3)
 21. 10YR8/6黄褐色粘土(地山)

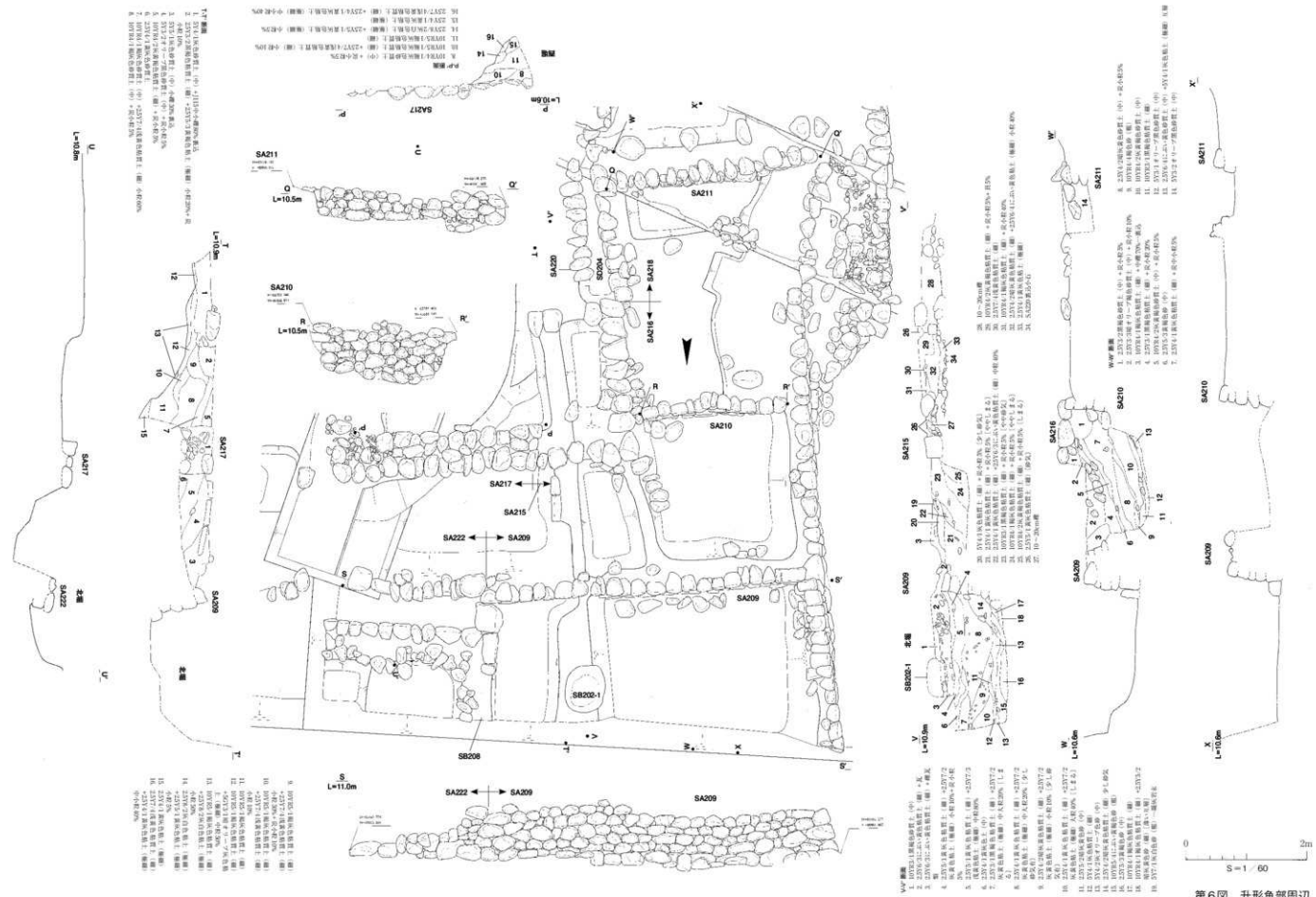


第4図 平成20年度調査区

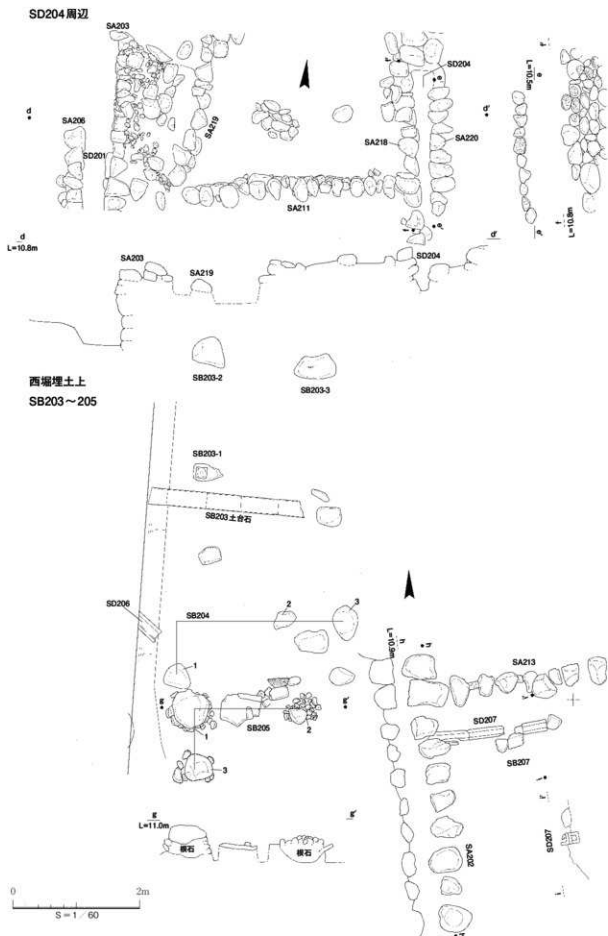
平成21年度調査区南壁



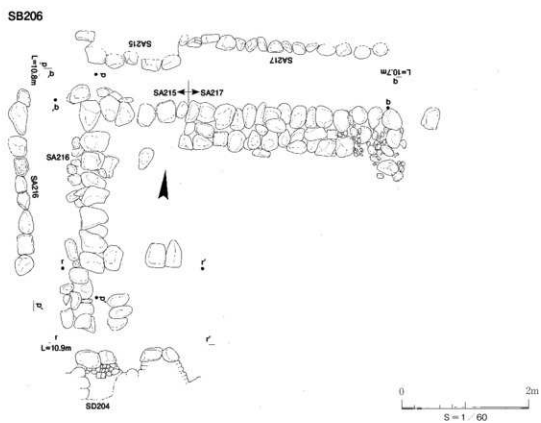
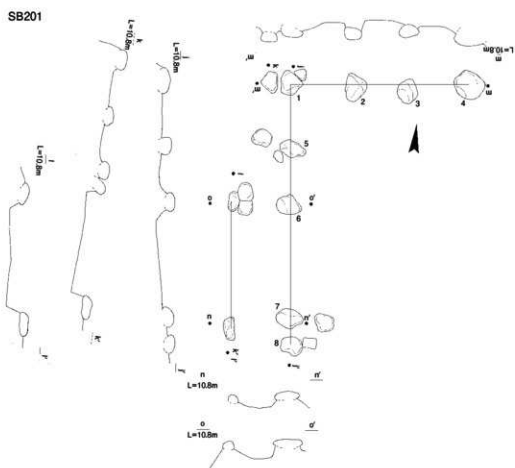
第5図 西壁石垣、SD201、SD202



第6图 升形角部周边

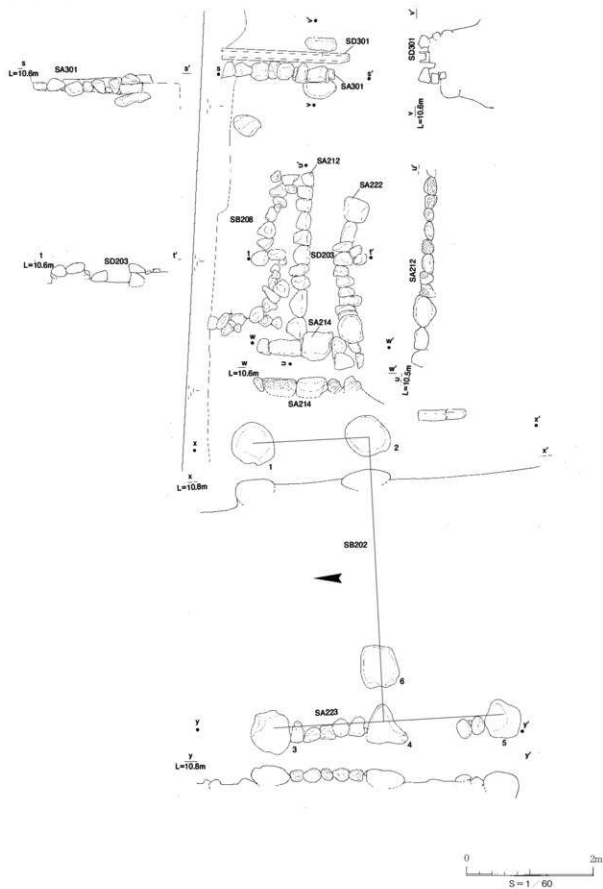


第8図 SD204、SD205、SA202、SA211、SA213、SA217、SA219、SA220、SB203~SB205、SB207



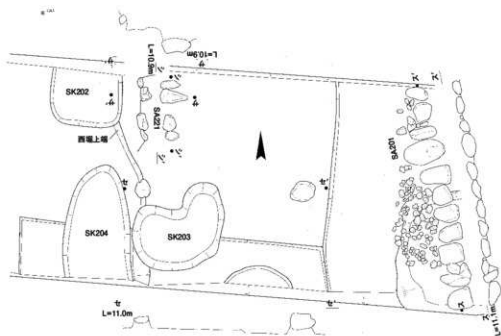
第9圖 SB201、SB206

北編埋土
SD203、SB202

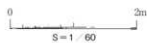
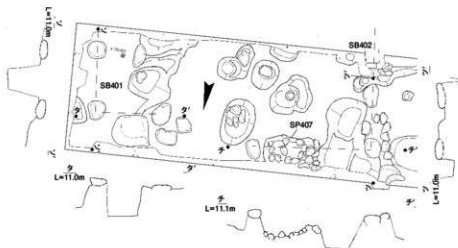


第10回 SA212、SA214、SA222、SA223、SA301、SD203、SD301、SB202、SB208

南東部西堀上堀～SA201

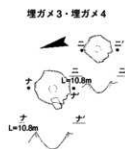
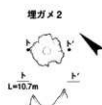
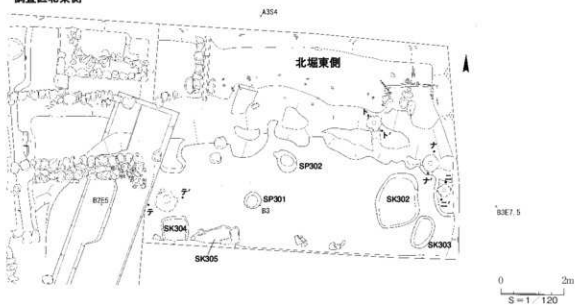


南東部（升形内）建物跡

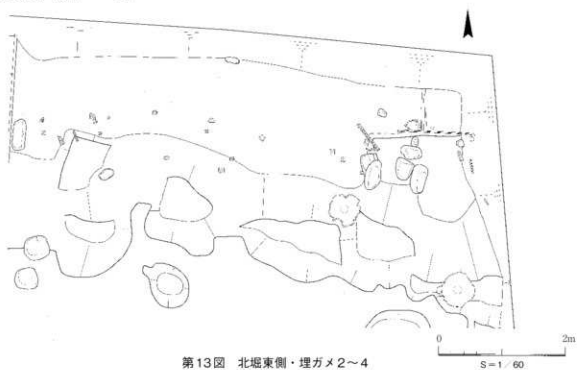


第12図 SA201、南東部（升形内）建物跡②

調査区北東側



北堀東側杭・間板



第13図 北堀東側・埋方メ2~4

第3章 総括

本調査で対象とした調査地は、升形の北辺および西辺にあたり、調査区は升形の西・北端から堀土居側（升形側）岸部および升形内部に設定した。南堀および堀外側岸部については、現行の道路下にあたるため未調査で、堀堆積土および埋め土は調査区外へ続いていたため、堀幅については、検出幅よりも広がったと考えられる。また、各期の年代的位置づけについては、遺物の整理途中であるため暫定的なものである。

本報告では、升形の変遷を7期に分けて記述した。そのうち、石垣の構築を伴いながら堀を埋め、堀の平面形状が大きく変化するものは、Ⅳ期以降である。

第Ⅰ～Ⅲ期（17世紀初め～17世紀後半）は、土居側堀岸が土坡で、調査区内で堀岸としての石垣が確認されない時期である。構築当初の土居側堀岸は、基盤となる粘土層を掘り抜いた素掘りとなっており、本来、堀内側に沿う形状で土居が築かれていたと考えられる。第6図T-T'断面と第7図b-b'断面で削平された土居盛土基部を検出しているが、検出できた幅は約2.2mで調査区外へ続いている。C3区SA201は現在までの地籍境とも重なる位置にあり、何らかの境界を示す石列と考えられ、SK203西端付近で確認したⅠ期堀岸からは約5mの位置となる。構築当初の堀幅（道路際までの推定幅）は、北堀で約5m、西堀で約11mとなる。寛文7年以降の城下絵図では外道の描写があるが、堀堆積土の状況からとくに北堀側の道幅は現在よりも狭かったと考えられる。防衛上、堀外側に巡る道が構築当初にはなかったと仮定して道路幅までを堀跡とすると、推定される堀幅は北堀で約11m、西堀は約15mとなる。Ⅱ期の17世紀中頃にかけては、升形内部のC4区にSK404が掘削され、早い段階から宅地化が始まったと考えられる。現存最古の城下絵図である寛文七年金沢図（1667年・石川県立図書館蔵）では既に升形内に町屋の記載を見いだすことが出来る。

第Ⅳ期（17世紀末～18世紀初め）初めから、石垣の構築を伴いながら西堀の一部を埋め立て、宅地化を始めた。宮腰往還の宮腰側から見て升形前面にあたる西堀の升形堀に近い部分において、SA203を西面としてSA211を北面とする石垣を築き、突堤状の埋め立てを行った。これにより、西堀は約5m堀幅が狭まった。埋め立て地には礎石建物（東西2.85m×南北4.2m以上）を建てている。升形隅部から北堀側にかけては、土砂により徐々に堀幅が狭まったものの依然素掘りの土坡だったと考えられる。

第Ⅴ期（18世紀前半）初めには、第Ⅳ期埋め立ての際に築いたSA211の北約4mの位置にSA210を築き、SA203を北に延長して東へクランクさせSA204を築いた。SA210が北堀東側の土坡延長上に築かれ

たことで升形北西隅部が石垣となった。

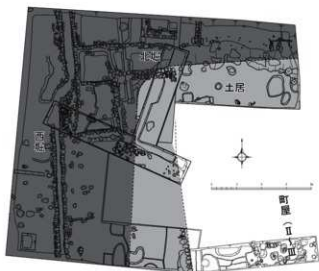
第Ⅵ期（18世紀中頃～19世紀中頃）初めにはSA210の北側にSA209とSA222を築き、北堀幅をさらに約2.9m狭くした。また、SA204北端部をSA209との交点まで延長し、隅角部に算木積みの隅石を設けた。北堀東側には依然石垣は築かれないが、埋め立てによる土坡堀部にはジグザクもしくは二本ずつ並べて打ち込んだ杭の間に横板を立て土留め（間板）としている。第7図b-b'断面をみると土居側堀岸がほぼ垂直なため、土留め板は堀底から約1m以上の高さまで設けられていたと推測される。

第Ⅶ期（明治時代以降）初めには西堀・北堀とも大規模に埋め立てられた。埋め立ての際、西堀石垣の升形角部から北に新たにSA208を築き、また、SA203・SA205・SA204・SA208に對面してSA206・SA207を新たに築きその間を幅約0.5mの溝SD201と幅約0.7mのSD202とし、新たに築いた石垣背面の堀を全面的に埋めた。この溝は北側の道路下へと抜けており、調査区内の北堀は完全に埋め立てられた。西堀の埋土（第3層）下層からは「萬延年製」裏銘の瀬戸産染付碗が出土している。万延年間は元年（1860）のみである。また、埋め土の第3層下層出土遺物は幕末期の様相を示し、印判手の染付磁器が出土しないことから、埋め立ては明治時代初年ごろと考えられる。明治2～3年頃に惣構土居の取り壊しや堀の埋め立てが市内で行われており、升形の堀埋め立ても同時期に位置づけられよう。

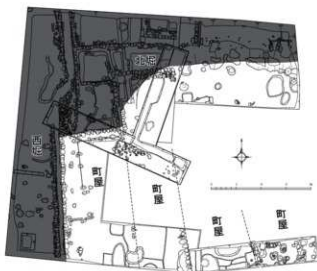
第Ⅰ期の堀深さは、西堀南端部で掘削したサブトレンチ部において升形内部の第Ⅱ期生活面までの比高差で約3mである。以降の堀深さの変遷は、西堀石垣の下端変化から知ることが出来、第Ⅳ期が約1.5m、第Ⅴ期が約1m、第Ⅵ期が約90cm、第Ⅶ期の溝SD201・SD202の深さは約65cmである。

第Ⅳ期以降の埋立地上に建てられた礎石建物および東隣の土居跡西辺上の宅地は、文化8年（1811）「金沢惣構絵図・文化9年「御惣構等番人名帳」（金沢市立玉川図書館蔵）によると、「橋番人 鶴生孫 左衛門 後家」「岡山崎屋 九兵衛」屋敷と推定される。また、後藤家文書「文禄年中以来日記」によると、享保5年（1720）に、惣構番屋敷下の堀に石垣を築くよう指示があったとされる。升形地点の発掘成果からは、この指示の前から石垣を伴う堀の埋め立てが始まっていたことがうかがえる。

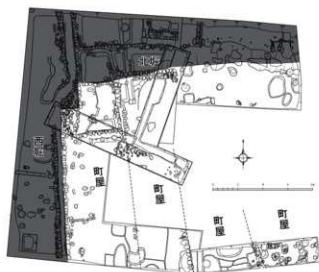
参考文献
石川県立図書館蔵 1976「文禄年中以来日記」金沢城郭史料
金沢市史編さん委員会 2000「金沢市史」資料編6



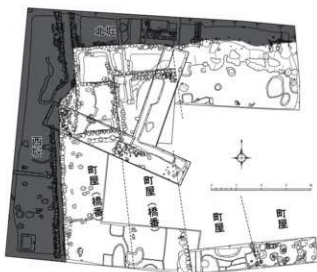
第I~III期



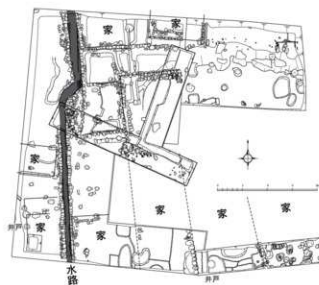
第IV期



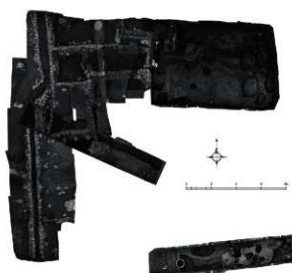
第V期



第VI期



第VII期



俯瞰モザイク写真

第14図 西外惣構跡升形地点 遺構変遷図

同

大工職

藏人橋々番人

小間物并八百屋物商売

同

たはこ商売

九人金商売

古金商売

同

小間物商売

― 物構 鈴見屋九兵衛 赤

主計橋々番人

髪結職

同

大工職

材木町橋々番人

同

越中井波・城邊中使小下宿

同

たはこ商売并油小売

備中銀細工

白銀細工

同

古手并打橋商売・大工職

同

越前江橋々番人

同

荒物商売

同

八百屋商売并かせき

八坂惣構番人

桶屋職

小立野惣構番人

同

檜物屋職

― 惣構 組合頭米屋次平 へ

西町橋々番人

春日屋 其兵衛

越中屋 彦右衛門

八百屋 伊右衛門

笹塚屋 又右衛門

同

松任屋源左衛門後家

竹橋屋 宗助

若林屋 吉助

塩屋 弥三郎

是安屋 助三郎

能登屋 喜三郎

鈴見屋 九兵衛

新保屋 善右衛門

同

四十万屋太兵衛

福岡屋 長兵衛

井波屋 与助

桶屋職

同

桑山保重門業商売

同

小間物并番人

同

紙合羽織

同

八百屋商売

同

荒物商売・御能作物師

同

登職并針職

袋町橋々番人

同

小間物并八百屋商売

同

湯風呂商売

同

森山三誠職并奉公八口入

同

小間物商売

同

大浦屋 理兵衛

同

〔金沢町名鑑 加藤能文庫 御惣構等橋人名帳〕

〔前略〕

〔文政七年 道橋橋亭

一、登屋橋渡四間、幅五間、橋台石垣共

一、同所往來橋台迄悪水橋長八間、幅三尺、溝縁四板

一、宮内橋渡五間、幅式間、橋台石垣共

一、同所橋台口橋巻木長卷丈、幅巻尺、同所水上往來溝

橋渡式尺、幅七尺

〔中略〕

一、松平殿馬橋悪水橋長式間、太サ巻尺宛、式ヶ所

一、同人居屋敷向惣構土居之内橋長六間、幅式尺

一、前田 前橋渡四尺五寸、幅志丈、左右石垣

桶屋 彦三郎

大野屋 仁右衛門

才田屋 小兵衛

同

粒子屋 権兵衛

同

辻屋 長右衛門

同

越前屋 三右衛門

同

越前屋 喜右衛門

同

中屋 喜右衛門

同

小鳥屋 安兵衛

同

米屋 次平

同

〔金沢市史資料編 6 加藤能文庫 金沢道橋橋亭〕

〔以下略〕

〔出典史料の解説

〔文祿元年以来等之旧記〕普請会所穴方(石垣専門職

後藤彦三郎が正倉金技術による石垣構築を主張して金沢

城代に提出した城内絵図や秘伝書等の一。文政八年成

立。〔御惣構等橋人名帳〕

〔金沢道橋橋亭〕文政七年成立。道橋方編 作事所の修理

が貼付される(金沢町名鑑)(金沢市立玉川図書館蔵全

四十冊の一。金沢城下の各町群衆の才許区毎に番付を付

けて別冊に作られ、管轄区域内の町の組合別に住人の職

業・名簿を記す。

〔金沢道橋橋亭〕文政七年成立。道橋方編 作事所の修理

にかかると川溝・橋・悪水橋・坂道・石垣等の場所及び各々

の幅・長さ、及び安水!文政年間修理記事。嘉永五年

成立の〔金沢道橋台帳〕にも、作事所より道橋方へ引送

りの道橋等修理場所及びその幅・長さを記す。

座頭庄ノ小路

一、小竹前橋渡五尺、幅七尺

一、菊池前溝橋渡五尺、幅式間、橋台石垣

一、物構生洲橋渡六尺、幅七尺、橋台四板

石屋ノ小路

一、同所橋木村赤十郎前橋六尺四寸

一、安江町外形橋渡三間式尺、幅式間巻尺

一、同所橋台橋長三間、幅式尺宛式ヶ所

一、熊坂橋式間四尺、橋台石垣

一、同所橋台悪水橋巻ヶ所長式間、太サ巻尺

一、東本寺町出口橋渡四間、幅式間、橋台石垣

一、同所橋分西御坊町入口迄堀縁口橋四ヶ所長式間、太

西外惣構跡升形地点関連史料

1 惣構橋番屋下の石垣

(前略)
一、享保五年之比宮崎長太夫御小將頭之時分之由、心付

而惣構之内外之橋番之屋下等を石を以石垣ヲ為し、堀底之隙ヲさらへ、水洩之深なき様ニいたされ候よし(以下略)

(「金沢城郭史社」後継堂文書「文禄年中以來之旧記」)

2 文化九年 惣構等橋番人名帳

(表紙)
文化九年
四十

御惣構等橋番人名帳

申三月

惣構	イ	組合頭	平松屋久兵衛
同	ロ	同	金平屋市右衛門
同	ハ	同	戊支屋与兵衛
同	ニ	同	越後屋作兵衛
同	ホ	同	跡見屋九兵衛
同	ヘ	同	米屋次平
惣構 組合頭平松屋久兵衛 イ			
惣構橋々番人			
豊屋職			
同		豊屋	理三郎
同		小間物商完并女奉公人口入	竹屋甚兵衛後家
同		宮内橋々番人	
同		古金商先并亀中櫛存細工	能登屋 理兵衛

魚商光并かせき

御徒橋々番人

かせき

同

かせき

御買橋々番人

越前館浦海士井

能登部・石川商百姓等宿

同

紺屋職并女奉公人口入

香林坊橋々番人

豊衣商完

同

呉服・太物商完

御寄川橋々番人

銭屋并橋商完

同

右衛門橋々番人

小間物商完

同

湯風呂商完

甲斐守様前土橋番人

坊屋職

同

木地細工

同

豆蔵商完

同

小間物商完

同

生田惣構番人

かせき

黒瀬屋 長右衛門

本折屋 小兵衛

同

鶴屋 平右衛門

同

泉屋 小兵衛

御座屋 仁兵衛

米屋 与三八

同

平松屋 久兵衛

能登屋 平次郎

同

口 |

高岡屋 仁兵衛

同

八口屋 太十郎

同

笹屋 庄右衛門

同

高松屋 長左衛門

同

金平屋 市右衛門

同

福久屋 清七

同

泉屋 六兵衛

| 惣構 組合頭戊支屋与兵衛 ハ |

升形橋々番人

同

銭屋并煎餅商完

同

懸ぬい職人

折渡橋々番人

同

調酒并道具商完

熊坂橋々番人

同

そは切商完

同

東米寺町橋々番人

古手・太物并煎餅商完

同

小間物商完

塩屋町土橋々番人

同

小間物・四十物・八百屋商完

同

小間物并塩・油小完

同

| 惣構 越後屋作兵衛 ニ |

浅野川小橋々番人

同

煎餅并団子餅商完

同

唐等并舶商完

同

麦屋并からつ物商完

山崎屋 九兵衛

同

鶴屋孫三郎後家

同

戊支屋 与兵衛

同

中村屋 甚九郎

同

林屋 新兵衛

同

福久屋 仁右衛門

同

熱野屋 与左衛門

同

鶴屋 仁兵衛

同

能と屋 清八

同

住吉屋 庄助

同

能登屋 長右衛門

同

越後屋 作兵衛

同

塩屋 吉郎兵衛

同

徳丸屋 市右衛門

報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし かなざわじょうそうがまえあと 4							
書名	石川県金沢市 金沢城惣構跡Ⅳ							
副書名	金沢城下町遺跡（西外惣構跡升形地点）発掘調査報告書							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	276							
編集者名	庄田知充・谷口宗治							
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番地							
発行年月日	西暦2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査 面積	調査 原因
金沢城下町 遺跡（西外 惣構跡 升形地点）	石川県 金沢市 本町 1丁目	172014		36°34'24"	136°39'56"	2008.7.1～8.12 2008.12.12～16 2009.3.4～12	67㎡	学術調査 復元整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
金沢城下町 遺跡（西外 惣構跡 升形地点）	城下町 惣構	江戸時代	堀、堀石積 建物、土坑	中国磁器、国産陶磁器、石製 品、金属製品、木製品、瓦		堀跡、升形内の建物跡 を検出		
要 約								
<p>金沢城惣構は、城防備のため慶長期に築造された土居と堀を中心とした防御施設である。金沢には東西それぞれ内外二重の惣構があり、城を囲む4筋の防御線となっている。西外惣構は、金沢城南東方向の小立野台地裾部を起点とし、城の南側を東流して香林坊で北国街道と交差し、北上して升形に至り、本願寺金沢東別院南東角から北西に折れ、西流して浅野川に至る。升形は、惣構が街道と交差する交通・軍事上の要衝に設けられた防御施設で、敵の侵入を防ぐために堀と土居を曲げてその内部に四角い空間をつくっている。本報告の調査地は、金沢城下に現存する唯一の升形遺構である。</p> <p>発掘調査は、平成20～22年度にかけて3次にわたって実施した。第1次調査（平成20年度）では、升形遺構の残存状況、第2次調査（平成21年度）では、升形遺構の範囲・規模・変遷過程、第3次調査（平成22年度）では、升形下流部の堀の構造と升形内部空間の状況が明らかになった。</p> <p>本調査により、惣構の代表的な防御地点である升形の構造の実態や、升形における惣構の堀の変遷・土地利用の変容が明らかになった。</p>								

石川県金沢市

金沢城 惣構跡Ⅳ

（『金沢市文化財紀要276』）

平成24年（2012）3月30日発行

発行 金 沢 市

編集 金沢市埋蔵文化財センター

〒920-0374

石川県金沢市上安原南60番

電話 (076) 269-2451

印刷 株式会社栄光プリント



西外惣構跡升形地点全景 西から



升形角部 (SA204・SA209・SA210・SA211) 北西から



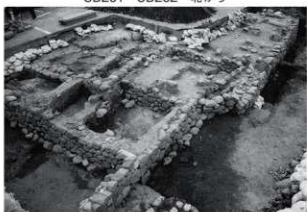
SD201・SD202 北から



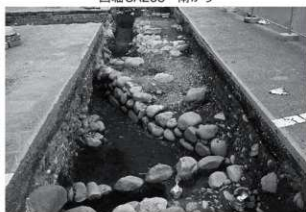
SA202・SA203 南西から



西堀 SA203 南から



SA209・SA210・SA211 北西から



SA209・SA210・SA204・SA205 北から



SA208・SA204 西から



升形角部 北から



西堀F-F'断面西側・堀底サブトレンチ 北西から



SD202 Z-Z'断面 南から



北堀V-V'断面 西から



西堀F-F'断面東側 北から



北堀W-W'断面 西から



西堀Y-Y'断面 北から



北堀T-T'断面 東から



SB202 北西から



SA211・SB201 北から



SB203~205 南から



SA217・SA215 T-T'断面 東から



SB203-3 墨書のある石 南から



SA201・SD205 南から



SD203 北から



SD204 南から



SA203・SA221から東方向



SA201・SE401から東方向



SB401 東から



SK404から西方向



SP402・SP404～406 南から



埋カメ2～4 北東から



北堀東側 西から



北堀東側周辺 西から



北堀東側 北西から



北堀東側 a-a'断面 東から



北堀東側b-b'断面土留め杭 西から



北堀東側土留め杭と間板 西から